

学びの灯

ようこそ、広島都市学園大学 子ども教育学部へ

子ども教育学部には、様々な研究をされている先生方がいらっしゃいます。

このページでは、毎月、一人一人の先生方の思いや考え方などを記していただき、読んだ皆さんの心や頭に「学びの灯」をともします。

一つ一つの「灯」は、いくつか集まると、きっと大きな明るさとなり、皆さんの未来を明るく照らすものとなるでしょう。

また、ある「灯」は皆さんの拠り所となって、どんなときであっても、希望と温かさを保ち続けてくれるでしょう。

さらに、皆さんが「新しい灯」をともし、多くの人々の未来を明るく照らすことに役立つことでしょう。

さあ、今月は、どんな灯でしょうか？



「科学」「確信」「共感」への道のりをともに歩みましょう！

子ども教育学部 障害児教育等担当教員 児嶋芳郎

もう四半世紀も前の話ですが、まずは大学へ入学当時の私自身の思い出から。

「もう（受験）勉強をしなくていい。大学生活を楽しもう！」と気の抜けていた私。そんな時、のちの指導教員から声をかけられました。「君は学んでいるかい」。大学での学びは、誰かに「勉める」ことを「強られる」ものではなく、自ら主体的に「学ぶ」ものなんだとハッとしたことを覚えています。

私は、障害のある子どもや特別な教育的ニーズを抱える子どもに関する講義を担当しています。「通常の保育所や幼稚園、小学校の先生になるから、自分には関係ない」と感じる方もいるでしょう。しかし近年、通常学級に在籍する「発達障害」の子どもたちの存在がクローズアップされており、文部科学省は通常学級に在籍する子どもたちの約6.5%が「発達障害」を疑われると報告しています。現場では多くの教員が「どのような教育を行えばいいのか」と悩んでいます。教員をめざすならば、決して関係がないことではありません。特別な教育的ニーズを抱える子どもを指導できる専門性が、今後はすべての教員に求められていくでしょう。

では、大学時代に障害のある子どもや特別な教育的ニーズを抱える子どもについて何を学ぶ必要があるのか。障害に関する基本的な知識や指導法に関してはもちろんです。しかし、それらを学ぶのは「この子は〇〇という障害だから仕方ない」「△△の障害には□□の指導法で」と枠にはめるためではありません。子どもたちの「真のねがい」を読み解くために必要なのです。

障害のある子どもや特別な教育的ニーズを抱える子どもたちは、「問題行動」と周囲にとらえられやすい姿を見せることがあります。ですが、「問題行動」の裏には様々な子どもたちの「真のねがい」が隠されています。そして、子どもは誰もが「よりよい自分になりたい」というねがいをもっています。大学時代に学ぶべきことは、子どもたちの「真のねがい」を読み解くためのたしかな「科学」と、子どもは誰もが「よりよい自分になりたい」との思いをもっているということへの「確信」、そして子どもの思いに深く「共感」する姿勢だと思います。

さあ、ともに「学び」の道を歩いていきましょう！